

あさひ燦々

旭労災病院院外広報誌

理念 信頼される医療、誇れる医学

第13号



独立行政法人 労働者健康福祉機構
旭労災病院 病院長 木村玄次郎

旭労災病院にとって昨年は、経営面において過去最高の年でした。入院患者が著しく増加しているのに対し、外来患者数はほぼ横ばいであり、理想的な入院中心型の病院へと移行しています。その理由として紹介率、逆紹介率の上昇があり、これらの点では既に地域医療支援病院の基準を達成しています。この4月からは念願の二次救急病院に指定されることが決定しました。つまり、急性期医療を担う地域中核病院「コンパクトで骨太の病院」として名実ともに社会から（患者さんから、医療機関からも）認知されてきた結果

と考えます。

地域と旭労災病院との関わりは、単に病気や老健施設からの患者さん、健康診断受診の方々に留まらず、尾張旭市や商工会、名古屋産業大学、ロータリークラブの市民祭や健康フェアなどのイベントへの協力、東日本大震災復興支援への職員派遣（医師、薬剤師など）、救命救急士の研修、金城大学や名城大学、愛知学院大学薬学部の臨床実習生、名古屋市立大学や名古屋大学医学部の学生臨床実習、瀬戸旭看護専門学校や名古屋市医師会看護専門学校、名古屋医専の看護学生実習、名

古屋経済大学や修文大学の栄養士学生実習、星城大学や中部リハビリテーション専門学校、国際医療学術専門学校の理学療法士や作業療法士学生実習、中学校（近隣4校）生徒の職場体験受け入れなど、近隣社会・各種団体と密接な関係にあります。勿論、2週毎に院内で近隣医師との症例検討会、瀬戸旭医師会との伝統ある合同研究会（千成会）も積み重ねています。尾張旭市の政財界との懇話会でも積極的に発言しています。一方、ボランティアの方々には定期的に病院内を巡回し車椅子などを点検・修理、病院の被服や小物の修復お裁縫仕事などで御尽力いただいております。深く感謝しております。このように相互に地域と密着した関係は今後益々重要性を増すものと確信します。

さて、今年から4年後の完成を目指し新病院の建設に着手する予定です。これまでの夢を一気に実現させるチャンス到来です。ところで現在の旭労災病院は、アクセスが良くありません。実質的に尾張旭市の市民病院の役割を果たしているにも拘わらず、病院と市の中心部を結ぶ道路が狭くバスの運行が不可能です。名古屋市守山区からのアクセスも同様です。昨年7月、旭労災病院に隣接する広大な土地を尾張旭市が名古屋市から購入しました。この土地を活用すれば、病院へのアクセスを改善させることが不可能ではありません。ただし、道路を新設いただけるか否かによって病院建設プランが大きく変わってきます。建設が間近に迫る中、道路をどうするかは、

市民の皆様の御意見を集約して尾張旭市が責任を持って至急決定いただきたいと思います。長期的には、病院周辺の遊休地を災害時の避難所とし、我々の病院が災害拠点病院の役割を果たせるような計画が重要ではないかと考えます。病院は社会や市民の根本的基盤であり、病院建設は市を活性化させる起爆剤でもあるため、“街起こし”に直結しています。是非、市民の皆様で議論を高めていただければ幸いです。

これまで職員には、ややもすると何となく“古くて小さい”病院との意識がありました。実際には、我々の病院に一步でも足を踏み入れ隅々まで観察していただくと、古いけれども大事に磨き込んで使われ、輝いている姿に驚くはずです。職員一丸となり、歴史と共に価値を高めるべく日々励んでおります。新病院が完成すれば、環境は一変し、地域に親しまれる「コンパクトで骨太の病院」として“温かみがあり生命の尊厳を大切にする”と云う特徴を備えて進化し、これまで以上に社会に貢献できることは疑いもありません。この新病院建設を契機にハード面での刷新に加えて、ソフト面でもレベルアップを是非達成したいものです。地域に密着しながら、世界を見据え社会に貢献することこそ独立行政法人としての使命です。今後共、地域密着型の旭労災病院に対して地域の皆様から暖かい御支援をいただきますよう本年もどうか宜しく願い申し上げます次第です。

